AV男優・真羅山太資の私性活

　真羅山太資(まらやま・ふとし)は、三十歳のAV男優だ。身長は百六十五センチ、体重は七十五キロで小太りな外見だ。AV男優としては中堅だが、逆駅弁ファックを編み出した。AV女優と対面してセックスを行う駅弁に対して、AV女優に背中を向けさせて、後ろからペニスを挿入し、女優の下腹部辺りを抱える。

AV女優は両脚を上げて、宙に浮いた格好になるのだ。これには有名AV女優も、

「ああん、飛んでるーっ。」

と悶えまくったのである。女性器が下付きの女優と行いやすい体位だ。

その体位は真羅山が二十五歳の時、福岡空港のトイレで客室乗務員の女とセックスした時、女はトイレの壁に両手をつけて尻を突き出した。

「このポーズで、したいの。アテンション、プリーズ。」

とハスキーな声で、二十二歳の巨乳の客室乗務員は懇願したのだ。

太資は、

「ようし。このポーズでハメるよ。」

と答えると、女の尻を持ち上げるようにして挿入した。客室乗務員は靴を履いた両足をあげて、

「ああっ、飛行機の中でセックスしてるみたいだわ。」

と乗務員の制帽をかぶった黒髪を乱しながら、太資の野太いモノをぴっちりとマンコで包み込んでいた。ショーツだ

け下ろして、彼女は紺色の制服を着たままで、スカートは制服でミニだった。膨らんだ彼女の淫肉の唇は、太資の肉竿をヌメヌメと刺激した。太資は思わず、

「おわっ。」

彼女は、

「アハン、ハアンッ。」

と声を出してしまった。幸い誰も入ってこなかった女便所だった。

　その後で、客室乗務員の彼女、名前は滝上夢代(たきうえ・ゆめよ)は、飛行機に乗るのだ。そのために制服を着ていたのである。夢代のヒップは制服でも隠しきれない大きさで、かなりの男性乗客は彼女の歩いて動く尻を見ていた。

その尻の中に少し前、真羅山太資が盛大に白液を注ぎ込んでいる。

そういう後の女性の尻は、淫らな雰囲気を醸し出すものなのだろう。乗客の一人は彼女の尻に手を伸ばしかけたが、自制した。

　この滝上夢代は、それから後、一ヶ月して空港のロビーで真羅山に告白した。

「わたし、結婚する事になったわ。いつまでも客室乗務員なんて、やってられないものね。」

結婚?誰とするんだ、と真羅山の頭の中で思いが彷徨う。

夢代はニカッと白い歯を出すと、

「同じ航空会社のパイロットよ。四十歳だけど、一晩に二回はしてくれるから、太資より多いし、テクニックも上で、わたしのアソコを三十分も舐めてくれたりもするの。

結婚したら毎日するって、言ってくれてるのね。つまり、交渉ね。ここ、ロビーだから、表現は抑えないと。

要するにね、太資よりうまい人だから。」

ガーン、と雷のようなものが太資の頭の中で轟いた。夢代は制服を調えると、

「それじゃ、さよなら。もう、会えないから。」

と言葉を残して、太資の前から立ち去ったのだ。

　正にこの時に太資は、AV 男優になる事を決意したのだ。自分は夢代と結婚するつもりだった。それを呆気なくパイロットに持っていかれたのだ。

太資は福岡空港で、航空便の荷物を動かす仕事をしていた。

　その仕事を辞めて上京する事にした。人手の多い今、会社を辞めるのは簡単だった。夢代と結婚していたら、太資はその会社で働き続けただろう。女の影響と言うものは殊の外、大きいものなのだ。

パイロットとセックスを比べられて、別れを通告されるという男にとって屈辱的な場面を経験した太資は、もっとうまくなりたかったし、多くの女とやりたいという気持ちもあった。

そういう思いを秘めつつ、新幹線に乗って東京へ。

　東京についてから昔ならAV男優を募集している事務所を探したりしたのだろうけど、今はインターネットで簡単に探せる。

「AV男優募集」

で検索すれば、いい。

ズラズラと沢山、出てくる。なにしろAVメーカーは、三百社は超える数はあるのだ。

それでも運よく太資は、大手AVメーカーのハメハメカンパニーにサイトのフォームから応募していた。

ハメハメカンパニーは西新宿にあった。高層ビルが立ち並ぶ一角のビルの三階に、AVメーカーとは分からない外観の入り口がある。

ハメハメカンパニーとは通称で、ビルの会社名の表札にはHHCと出ている。

ドアを開けると一人の美形な長身の女性が、受付に座っていた。真羅山太資を見ると、立ち上がって、

「真羅山さんですね。専務が、お待ちかねです。」

と笑顔で個室に案内する。AVメーカーの女子社員は真面目な女性が、ほとんどだ。させ子のような女性は、いなかったりする。

女性がAVメーカーに持つイメージは、男性が持つイメージとは違うという事なのだろう。

ほとんどの場合、女性の体や顔を中心に撮られているのがAVなのだ。

　それにAVメーカーの人達は、優しくて真面目な人が多い。撮影技術もテレビ局に勝るものを持っているのだ。この理由は、こうだ。

映画全盛の時代に優れた人達は映画会社に入った。映画会社に入れなかった人間がテレビ局に入った。

そのうち、テレビが普及すると映画は圧迫され、興行収入も落ちてくる。

普通の映画では生きていけない人達は、アダルトビデオの世界に身を投じるようになり、そこで優れた撮影技術でAVを製作していったのだ。

レンタルビデオ店がAVメーカーの収入源ともいえるだろう。人がお金を払って借りるのがAVであり、タダで見るのがテレビなのだ。

　だからAVメーカーの人達は、優れた映像製作者でもある。

　太資の待つ、すべての壁が白い部屋のドアが開いてHHCの専務、五十代の筋肉質な男性が入って来た。背は高めだった。眼は丸く鋭い眼差しで、

「やあ、初めまして。専務の飯野栄蔵(いいの・えいぞう)と言います。福岡から応募してくれて、ありがとう。最初にね、健康診断があるよ。それ、大体、男優持ちだけど、君は今回はウチで持つからさ。新宿の病院に行って貰います。いい?」

「はい、もちろんです。」

「じゃあさ、今から行ってもらうよ。スタッフに同行してもらう。道川君というアシスタントディレクターと行ってね。」

道川 AD が呼ばれて、会社の近くにある病院に性病の有無を検査しに行った。道川は二十代後半の丸く肥った男で背は低い。

「真羅山さんの男優名ですけど、漫湖名眼留(まんこ・なめる)だそうです。」

と細い眼をして道川は、新宿の裏通りで語った。

太資は苦笑いした。これから多くの AV 女優のマンコを舐めるのでは、あろうけれども。

　病院では、クラミジア、HIV、淋病、梅毒、そして性病とはいえないが、B 型肝炎でないか、どうかを調べられた。

道川は検査結果を貰って、

「陰性でしたよ。つまり、安全でした。これで撮影には入れるな。」

と太資に話した。

このようにAV男優になるにも健康診断が必要だったりと、昔のように簡単には、なれなくなっている。

それでも昔と違ってインターネットで登録はできるし、まるで派遣の登録みたいだが、AV女優とガンガンやれるし、マンコも舐め回せてギャラも貰えるのだ。初回の絡みから、いい仕事をしたと監督に認めてもらえれば五万円は貰える事もあるらしい。それは、メーカーによって違うだろう。

　真羅山太資の場合、汁男優からではなく企画ものの撮影から始まった。

恋人を失った男

というもので、恋人をなくした男性宅をAV女優が訪ねて行って、セックスをするというものだった。撮影は社内にあるスタジオの個室で、おこなわれた。

椅子に座り、落ち込む漫湖名眼留。その時、玄関のチャイムが鳴って、名眼留が開けに行くと、

社長秘書のようなAV女優が立っていた。

「こんにちわー。なんか落ち込んでませんか?わたし、そんな貴方を助けたいんです。

救済 AV 企画、**恋人を失った男**というものを、やってるの。

わたし、春野桜姫(はるの・さくらひめ)っていう名前でーす。」

白いスーツの上下の桜姫の体は、出るところが出ている他は痩せていた。それで、腰のクビレが凄い。

白々しく思いながらも太資は、

「ええーっ。夢みたいだな。おれ、彼女を失ったんだ。」

夢代の事を思い出しながら、寂しそうな表情をする。なかなかの役者だ。俳優などは現場で監督に指示されて思い出しによる演技もする。太資は自分でやっているから玄人裸足で逃げ出す、というものだろう。

春野桜姫は美巨乳を誇示するかのように、白スーツの上着を脱ぐ。白シャツも脱ぐと白いズボンも降ろした。

立ち上がった太資の目の前に、桜姫のブラジャーに包まれた、たわわな乳房があった。それは乳首の透けてみえるブラジャーだった。ツン、と突き出たピンクの乳首を太資はブラの上から吸う。

「ああっ。うまいのね。」

桜姫は頭を反らせて、気持ち良さそうだ。桜姫の睫毛は長く、股間のショーツの陰毛も長そうだ。

彼女の乳首を吸いつつ、太資は服を脱いでいった。

結果として、太資は全裸、桜姫は下着姿だ。すぐに太資は彼女の下着をブラジャーから外す。

彼女の股間のＶゾーンは、黒々とした長い陰毛がその下の閉じた淫唇も隠していた。太資の指は彼女の膨らんだ淫唇の合わさった割れ目を、ゆっくりと辿る。

「ぁー、はぁーん。」

と声を出して彼女はビキニで日焼けしていない尻を揺らせる。太資の肉茎は蛇が鎌首を持ち上げるように上に立ち上がる。

　その時、監督の声が、

「はい、次は真ん中に置いてあるトランポリンに行って、乗る。そこで、跳びながら合体。」

と指示した。

二人は腕を絡ませつつ、トランポリンまで歩くと裸の彼らはトランポリンに乗り、ディープ・キスから太資のモノを立ったままハメて、二人で跳びはねる。

「ぁん、ぁん、ぁぁぁっ、あん、おまんこ、一番気持ちいいのーっ。」

と桜姫は、しまいには両脚を太資の尻に巻きつけ、両腕を彼の首に回して、ぶらさがり、マンコは太資の硬い肉茎を咥え込んでいる。脂肪のついた桜姫のマン肉は気持ちよく太資の肉砲に絡んで締め付けた。

彼は気持ちよくなり、

「あっ、出る。」

と叫ぶと、空中に二人が跳んだ瞬間、精も放っていた。降りた時、彼は膝をついて桜姫の大きな乳房が彼の胸に押し付けられた。

監督が満足気に、

「よし、いいぞ。トランポリン・セックス、うまくいったね。」

と二人を慰労するように声をかけた。

　ハメハメカンパニーでは、マンネリ化したAVを打破するために新企画を考案中だ。企画部の羽目田育造(はめた・いくぞう)は、三十五歳の独身男、だからというのか、今もAVに夢中なのだ。一応、百人斬りは達成している。

ハメタ!イクゾウの新宿ナンパ実録

という企画モノでは自ら主演していた。そのシリーズで、ある大企業の専務の娘を引っ掛けてハメ撮りに成功したのだ。

彼女は二十五歳、あと一ヶ月すると某財閥の長男との結婚式が控えていた。自分の望みというより、親に用意された結婚らしい。

瓜実顔の彼女は大きな眼を開いて、

「乗り気の結婚じゃないけど。」

とインタビューで答える。

羽目田は中背で、痩せ型だ。画面に顔は出ないが、

「じゃあ、好きな人が他にいるのかな?」

と尋ねる。

「いるけど、その人も又、親の勧めている相手と結婚するのよ。」

「なるほどね。それで、このAVに出ようというきっかけというか、動機と言うかな。それは?」

彼女は微笑むと、

「別れる彼はAVが好きなのよ。それでわたしが出ているのを彼が見ることがあったら、面白いなって。」

東京を下に見ながらのセックス、という AV 撮影が羽目田育造と、その令嬢、飯名レ美(いいな・れみ)とで行われた。

ヘリコプター二名貸切で、五万七千円弱という料金だ。

(2014/04/09 現在)

所要時間は二十三分程度である。七日前の予約で、なんとかなった。ヘリコプターの機体価格は五千万円前後なので、お得な料金だろう。

R44 という機体で、最高が時速 190 キロ、航続時間は三時間二十分、航続距離は 592 キロメートル。

高度限界は 4270 メートル。というヘリコプターで東京ヘリポートから羽目田と飯名は空へ舞い上がった。

東京ヘリポートは江東区新木場四丁目にある。

操縦士は後ろを見ないのだ。二十分の短い時間で、カメラは座席に置き、横からの撮影だ。

バタンバタンバタン、

とヘリコプターの羽が回り始めるとフワッと空へ昇った。

レ美は羽目田の膝の上に跨り、羽目田は彼女のスカートの中に手を入れてショーツを膝頭までずらした。擬似セックスなどは昔のAV、それと現在も芸能人専門レーベルでは時々、行われている。が、それでは面白くないので、羽目田はコンドームさえつけずに、やる。

だから、彼がズボンのファスナーを下げて、パンツから長大な陰茎を取り出しても、ゴムはつけなかったのだ。

「レ美ちゃん、いくよ。」

「うん、入れてー。」

大股を開いて羽目田に跨っているレ美のスカートを上げると、彼女のほどよい陰毛とその下のピンクの股間口が開いているのが見えた。モザイクはあとでかけるが、羽目田の眼にはレ美の淫口は男の男根を欲しくてしようがない、という形状をしているように見える。

たまらずに大きなレ美の尻を両手で引き寄せて、合体結合した。高度は一キロ位まであがっている。

レ美の顔を羽目田は横に向けて、眼下の風景を見させる。

彼女は、

「ああン、まるで天国ね。羽目田さんの、大きいわ。あっ、ァ、アアッ。」

と令嬢の慎ましやかな悶え声は、それだけでもオナニーで抜けそうだ。レ美は軽く大きな尻を動かしている。

ブルルルルル、と羽の旋回音が二人の耳に響く。

レ美の大きな胸を赤の上着の上から羽田は揉んだ。

「アフン、ウン、イイ。」

髪を振り乱してレ美は、のけぞった。ヘリコプターは左に曲がりながら飛行する。

羽目田はレ美の上着を脱がせてブラも外して、お椀型の乳房の硬くなったピンクの乳首を吸ってやると、眼を閉じて眉をしかめたレ美は、

「感じるわ。空の上で、アアーッ、もっと、チンコでこすってぇー。」

と叫ぶと、羽目田の首に手を回した。お嬢様がヘリコプターの座席で男に跨り、白い両足を大きく広げている。その脚は、やがて羽目田の尻に絡まり、強く締め付けた。

「あっ、あっ、オマンコ、とろけそうよぅ。いくっ、いくっ。」

とレ美は顔を赤くして、よがりまくった。口をポカンと開いて、赤い舌を出すと、

「いくわー、あっ。」

と悶えて、だらーんと体を伸ばした。失神したらしい。二十分は早く過ぎる。躾よく育てられた令嬢の乱れた姿は一部の男しか見られなかったわけだが、AV で何人かは撮られてきたとはいうものの、今回の飯名レ美は最高の女性だっただろう。普通、こういう令嬢は AV どころかテレビにも出たがらないのだ。

レ美の彼氏の事情で出演してくれて、青い大空でピンクの乳首を立てて失神したのだった。

　羽目田育造も又、福岡県福岡市の出身だ。それで真羅山太資をもっとメジャーにしたがった。漫湖名眼留の芸名も有名にしてやりたかったのだ。

ハメハメカンパニーでは芸能人などを使う事は、一切しない。女優、タレントなどの知的レベルの低い女のセックスなど今の時代には見られる事もない。そもそも女優などという職業の女は台本を読むのがいいところ、の頭の中身のお粗末な連中だ。

こういったのがテレビなどに出て、企業も自社の CM に出したりしてきたわけだが、おたくの商品って、あの馬鹿女優程度のものなのかね、と識者には見られているわけだが、

馬鹿企業はそれにはお構いなく、大勢の消費者にアピールできれば、と思っている次第だろう。

そもそも銀幕だのブラウン管に写ってきた女優など全てオツムのレベルの低い女である。

脚本を読むのが精々の頭であるのに、それ以上の事をさせる奴等が結構多い。

インターネットの時代になり、こういった馬鹿女優を追う人達も大いに減ってきたのだ。

　さて、ひるがえってAV女優とは、そもそもの初めから知性の高い女性が登場していた。国立大学生や国立大学院生という極め付きの女性も出演していたのだ。というのは、ご存知だと思う。

テレビ、映画の馬鹿女優など見るよりもAV女優を見る方が、知性の高い女性を見る事になるので、ためらわずにダウンロードやネット通販でDVDを買うべきだ、といえる。

真羅山太資も又、電子書籍を熱心に読んでいる。

「ちんこ立ちぬ」

という森建夫(もり・たてお)という人の書いた小説だ。

私は恋人を油山という福岡市の南にある療養所に訪ねた。もう二年も彼女は肺の病気で悩んでいるのだ。いい薬はあるのだが、高価なため実家の貧しい彼女は最低の治療費しか出してもらえなかった。もう二十になる彼女は、それでも胸は成長していた。

六人の相部屋に彼女は、いたのだ。みんな、もちろん女性ばかりで彼女の他は、おばさんばかりだった。

看護師に案内されてドアを開けた私を見たのは彼女、そう、郁埜(いくの)だった。

彼女は寝ていたが半身を起こして、

「来てくれたのね。わたし、あなたが来てくれると思ってた。」

と嬉しそうな顔で私に話しかけた。それは自分には意外だったのだ。

「本当かい?君は僕のことなんて軽く見ているのかな、と思っていたよ。」

「そんな、わたし、他の人には興味がないの。どうして、二年も訪ねて来てくれなかったの?」

「それは、ぼくは東京の会社に入社してしまったんだ。だから、福岡に戻る事は出来なかったんだよ。」

「そうなの、それなら来てくれなかったのも仕方ないわね。東京って、ゴホッ、ゴホッ。」

彼女は頭を前に傾けて咳き込む。私は、彼女に駆け寄ると、

「大丈夫かい?」

と声をかけて、彼女の肩に手を置いた。柔らかい気が自分の指に伝わってくる。右手はスルッと滑って彼女の胸に触ってしまった。

「あ、はっ。」

と彼女は声を出した。

「ごめん、手が滑ったんだ。わざとじゃ、ないよ。」

慌てる私に彼女、郁埜は、やつれた、つぶらな瞳を私の眼の中に向けると、

「感じてしまったわ。わたし、肺の病気なんだけど、おっぱいは二年で大きくなっちゃって。」

と照れたように言う。

「そ、そうだね。君とは高校の卒業式の時、以来だから。」

私は病室内を見渡した。今の彼女の反応を聞かれただろう、と。

だが、私の眼に映ったのは熟睡している五十代から四十代の主婦らしき人達で、さっきの郁埜の性の反応には気づかなかったらしい。

で、私のちんこは立ってしまっていたのだ。もちろん、半立ちだったが。

ちんこ立ちぬ、と私は頭の中で、その言葉を反芻した。

郁埜は顔を赤くして、うつむきながら話すのだ、

「なんか、感じたの?だって、あなたのズボンの股間のところ、膨らんでいるもの。」

「えっ、そうなのかい。ばれたら、しょうがない。でも、半立ちだよ。」

「それってさ、わたしの胸に触ったから、かしら?」

「だろうねえ、君の胸ってプリンの大きなものみたいだ。」

彼女は潤んだ瞳を二つ、私の方に向けると、つまり、顔全体も横向きにして、

「このまま、死んでいったら、セックスもできないのね。」

と大胆な事を言ったのだ。私は、ドギマギしてしまった。東京でインターネットの会社に勤めているが、サポートデスクで働いていて、外回りではないから未だに東京の人間にはなっていないと思っている。

「そ、そんな事ないよ。ぼくが、いるからさ。」

高校の頃の憧れの彼女だった。卒業して短大に進むも、肺結核で入院して未だに治らないという現代では珍しい症状だという。

病室にいる女性は全員、肺癌だそうだ。それも手遅れで治らない人達だという。そう、郁埜は話した。

「だからね、もう、このおばさん達は一日中、寝てるの。わたし達が何しても気がつかないのよ。」

そう話した郁埜の顔の色っぽい事といったら、なかった。大きな眼に、額を隠した長い髪、ほっそりとした首すじ、狭い肩、その下の小さなメロンのような二つの乳房は私以外の男性は触った事がない、と彼女は言う。

「自分の手で乳首をつまむ事もあるの。病気なのに性的発育とか感覚はあるのね。わたし、死ぬ前にセックスしたいな。」

「死ぬなんて事は、今は肺病ではないんだよ。癌でない限りは。」

と私は彼女を励ました。半立ちは収まりつつあるようだ。

「あら、ちんこ、小さくなったのね。だめよ、立たせていてほしいの。」

郁埜は柔らかで細い右手の指で、私の股間を触った。彼女の手からも柔らかな気が立ち上っていて、私のズボンの下の肉欲の道具にも浸透してきた。

「うふ、立ってきてる、立ってきてるわ。ヌンチャクを握っているみたい。」

そうなのだ。彼女は空手五段という、すごい女の子だ。それで美しい顔をしているのだ。高校三年生のときにも下校時に四人の男に襲われたが、いずれも蹴りの一撃で倒してしまい、しかもそれは男の股間の急所のために、全員が性的不能者になったという。

「郁埜さん。全部立ってきたよ。」

と私は告白した。彼女は軽く私の肉欲の棒をしごいて、

「ちんこ、立ちぬ、なのね。もしかしたら、わたし、肺がんになって死ぬかもしれない。だから、今、経験したいのよ。」

きりり、とした決意の眼で私を郁埜は見たのだ。

看護師は三十分の面会時間を許した。あと二十分ちょっとだ。

窓の外は一面の緑の林が見える。標高四百メートルのこの場所で、郁埜とセックスする事になるなんて、東京駅では思ってもいなかったのであった。

「ねえ、キスして。」

と郁埜は言うと、長い睫毛を伏せた。私は夢中で憧れの郁埜の唇に自分のものを重ねたのであった。ああ、滑らかで、

おいしい。私は郁埜の細い肩を丁寧に抱くと、キスを続けた。郁埜も両手を私の首の後ろや、背中に走らせた。

憧れだった彼女を抱き、キスしただけでも私は良かったのだ。何故なら、私は東京に恋人がいた。それも同じ会社の一つ上の女性で、私のデスクの横でサポートをしている。ただ、彼女とは喫茶店でコーヒーを飲んだりするだけの関係だったが、なんとなく結婚を意識するような女性なのだ。それでも、今、郁埜を、ほっておく事はできない。彼女は死ぬのかもしれない、という予測も私もしたのだ。こんなにも長く肺結核を・・・

ピンポーン、と真羅山太資の部屋のチャイムが高らかに鳴った。

太資は電子書籍リーダーをノートパソコンの横に置くと、

「はーい。どなた?」

と風呂上りのガウン姿で玄関に立つ。

小さな穴のガラスから見ると、二十歳かと思える若い女性がミニスカートで立っている。

若さに満ちたその姿は、チラチラと見えそうなスカートの下のショーツが気になる。

思わず鍵を外して、ドアを開けると、

「こんにちは。今日は、お仕事、お休みですか?」

実は夕方六時から撮りが入っているのだが、

「そうね、今、いいよ。」

と太資は答える。その女性は笑顔で、

「わたしたち、使用済み下着の訪問販売をしています。もちろん、一人暮らしの男性にターゲットを絞ってますけど。」

と説明して、右手に持っている大きな黒いバッグを持ち上げてみせた。

「なーるほどねー。でも、おれ、あまり興味ないなー。」

と太資は拒否してみせた。どう反応するかを楽しみに、である。果たして女性ミニスカート販売員は食い下がってきた。

「そんなこと、ないでしょ?オナニーのおかずにもなりますよ?」

「あんた、よくそんな恥ずかしい事、言えるね。」

「だって、仕事ですから。それに今は昼の二時で、このマンションのこの階は誰もいませんよ。」

「そうだろうけどさ、で、いくらするの?それ。」

「ありがとうございます。ブラジャーとショーツ、のセットで五万円です。」

「五万円、って、高いね。」

「その代わり、都内の高級デリヘル嬢のものですよ。そのデリヘルの電話番号とサイトのアドレスも書いてある紙も、ついてますから。それと、その高級デリヘル嬢の写真も。」

デリバリーヘルスと提携しているようだ。

「それを買ったら、あんたとやらせてくれるか。」

「いいえ。そういうサービスは、しておりません。」

「そうだろうな。よし、五万円で買ってやろう。」

「ありがとうございます。本番はしませんけど、サービスとしてミニスカートの下のショーツには触っていいです。」

太資は部屋に戻って財布を取ってくると、金を払って商品を受け取り、彼女のミニスカートをめくると、透けたショーツの淫らな割れ目を指でなぞった。

「アアーン。はい、さようなら。」

乱れた顔を元に戻して、その若い女は走っていった。

茶色の袋に入ったものを太資は取り出してみる。紫色のショーツとブラジャーが出てきた。その下着からは香水の匂いと、女の匂いが漂い流れた。それは太資の鼻腔から鼻の奥に入ると、マグマのように彼の脳髄に浸透していった。

(高級デリヘル嬢のマンコを覆っていたショーツだ。一度、ショーツになってみたいものだ。)と太資は思う。自転車のサドルになってみたいなどとは、物足りなさ過ぎる思いだろう。

考えてみれば、この紫のショーツは彼女が風呂にはいる時、便所で用を足す時、男とセックスする時、以外はいつも高級デリヘル嬢のマンコに接しているのだ。

袋からは一枚の紙が出てきた。それと写真だ。長髪のモデル体型の女性が写っている。この下着の持ち主だった女性だろう。二十二歳くらいに見える。全身が写っているが、脚も長く、胸と尻は程よく張り出している。その紫の下着を身につけた写真で、ショーツはマンスジが浮き出ている。

ブラには乳首が突出していて、紫の色は不思議な性欲を昂進させた。太資はズボンとパンツを脱いで、紫のショーツを履くと、すぐに淫肉茎は充実したのだ。

(おおっ、彼女のマンコがあたっていたところに、おれのチンコが触れている・・・)麝香のような匂いの中で太資はマスターベーションしてしまった。